

# てこな・ミュージック・ジャーナル

## 紫陽花の季節

### 6月生まれの作曲家

6月生まれの作曲家にローベルト・シューマンがいます。1810年6月8日、現在のドイツ連邦共和国ザクセン州ツヴィツカウで書店業を営む父親のもとに生まれました。現在は人口10万人ほどの街ですが、当時ライブツィット近郊の中堅都市として家庭音楽会や合唱コンサートなどが日常的に行われていました。シューマンの才能は幼い頃から、そのような音楽好きの人たちから注目されていました。

2年後、ショパン・イヤーとなります。生誕200年を記念して、多くのピアニストがショパンを演奏する計画を立てていることは、音楽プロデュースを職業とする私のところにも、あちこちから聞こえてきます。そのショパンと同じ年1810年に生まれたのがシューマンです。でも生涯においても作品においても、ショパンの方がはるかに語られ、演奏されていますから、生誕記念イヤーでも、ショパンの蔭でシューマンはこれまでどおりマイ・ペース。近づいてくる人だけをそっと招き入れてくれるのでしよう。

### 語りた音楽家

シューマン音楽は不思議です。楽譜がまるで語ることを待っているかのようなのです。「僕がどんな意図を持って、この曲を作ったかお分かりですか？」その問いかけはシューマンの場合、「えっへん！」と威張ったものではありません。舞台の蔭から、客席の反応をそっと覗いているかのように、決して押し付けがましいものではないのです。楽譜のあちこちにヒントが隠されているかのように、作品を手にしようと近づくと新鮮な驚きを与えてくれます。

シューマンのこのような才能を語るのに、父親の職業を切り離せないことは、よく知られています。本に囲まれて育ち、愛読書は？ともし尋ねられたら、幼いその口からはドイツロマン主義の作家ジャン・パウルやE.T.A.ホフマンの名が聞かれたに違いないのです。私たちは「ロマンティック」というと、甘美な、といった意味を思い浮かべることが多いのですが、本来は幻想、想像、幽玄などに結びつく言葉です。

市川市文化振興財団 音楽総合プロデューサー 小坂 裕子

### 自分の世界に遊ぶシューマン

シューマンはいつも自分の世界に遊んでいました。夢見がちな想像力で現実の世界から遊離して、文学に音楽に浸っていました。その成果からまず生まれたのが、音楽家としての門出を飾る「アベッグ変奏曲」作品1です。好きになった伯爵令嬢の名に因んだ主題。でも実在の人物ではなく、心の中に描いた恋人、それも楽音に変換できる名を作り出しました。アベッグをピアノの鍵盤に置き換えると、ラシ ミソソになります。ラシ、シ ミ、ミソソは、短二度、増4度、短三度で、ラからソへ上行する中に作られた三種類の音程からなるテーマは独特の音響をつくりだし、それが曲集全体に行き渡っていて、新鮮なエネルギーに満ちた曲集となっています。

シューマンという作曲家は、このように変奏曲でなくても、自分が編み出した主題にいつもこだわり続けました。1830年に作られた作品1であるアベッグ変奏曲から1839年の作品28の三つのロマンスまで、すべてピアノ独奏曲ばかりですが、いずれも音型、曲名、発想の出発点である文学など、その作品独自の主題を曲全体に感じさせるような工夫を凝らしています。

### 紫陽花とシューマン

紫陽花は日本原産ですから、シューマンは見たことはないかもしれません。

でも6月生まれのシューマンの音楽は、色彩を変えていく紫陽花のようだと思うときがあります。例えば、全体が6分足らずの短い曲、作品18のアラベスクは5つの部分からできていて、八長調のテーマ部分は小さく行ったり来たりしながら控えめな光を放っているかのようなのです。シンプルな中にも、臨時記号で調性を微妙に綾なし変化させ、その背後には手が届かない、入り込んでしまったら戻れない夢幻を感じさせる色彩が広がっているかのようなのです。シューマンのこのような音響世界は、雨の中で濡れる紫陽花を見ているような気分になるといって、奇妙に思われるでしょうか？ 移ろい行く紫陽花の色彩と緑の葉のうっそうとした様子は、幻想的でどこか妖しく、そこに見える深い陰影と、シューマンが織り成す音響世界には共通するものがあるように感じられてしまうのです。

語らせる音楽家シューマン、紫陽花の季節を出発点に生誕200年記念イヤーを目指して、その魅力をさまざまな作品とともに、これからも時にお話しさせていただこうと思っています。

